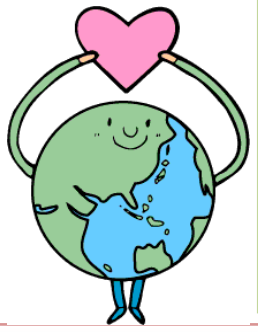
NPO ピースサポート協会　ニュース　第5号

ピースサポートとは「心の平和支援」の願いが込められています。　　２０１３年（平成２５年）１２月

発行　NPO 法人 ピースサポート協会
〒379-2143　群馬県前橋市新堀町 190 番地 1
TEL/FAX　027-265-2277
E-mail:info@peace-sa.co　URL:http://peace-sa.com

ごあいさつ　２０１１年３月１１日東日本大震災に襲われて２年９か月がたちました。今年は 4 月より「雄勝ワカメ復興支援」をスタートして多くの市民の皆さまから 11 月現在で 5,000 袋ものご支援を頂き、漁師の方々への生活支援とさせて頂くことができました。本当に有難うございます。しかし石巻市の被災地は、ガレキの撤去などは徐々に進んできていますが、避難されている方々の生活は未だに一からの出発です。
これからもさらに東北被災地へ直接届く生活支援を推進させて頂きたいと思っております。今後とも温かいご支援の程心からお願い申し上げます。

世界中の幸せは
一人の人の
心から



さらに福島県の原発事故の放射能汚染による「警戒区域」の人々は二度とふるさとの家に戻れないかもしれません。
今でも全国の震災避難者は 28 万 2 千人、福島県民の方々は原発事故により 5 万 4 千人の人々が、今も避難生活を余儀なくされておられます。
私たちは、この現実から目をそらさず、皆さまと共に被災地の方々の思いを分かち合い、未来の子孫のために安心して暮らせる日本の国を築いていかなければなりません。そのためにも平和な国を目指して力強く歩んでいきたいと思います。
多くの市民の皆さまのご協力を心からお願いいたします。
NPO 法人ピースサポート協会　理事長　久保田光明　拝

平成 25 年度下半期活動のご報告！　多くの市民の方々のご支援を頂きました。

4 月 12 日足利市民活動センターの皆さまのご協力を頂き、雄勝ワカメ復興支援が多くの足利市民の方々に拡がりました！

4 月 12 日は雄勝町立浜へ訪ね、被災された漁師の皆さまの生活支援のために**「雄勝ワカメ復興支援」**を立ち上げました。その時支えて頂いたのが足利市民活動支援センターの鈴木光尚氏はじめセンターの皆さまでした。お陰さまで、多くの足利市民の方々へ拡がり現在でも復興支援の輪が広がっています。本当に有難うございます。

5 月 11 日足利市民プラザで鈴木光尚氏を迎え被災地支援報告会が開催されました！

5 月 11 日（土）足利市民プラザで NPO 足利の風代表鈴木光尚氏を迎えて、東北の現状と今後の支援と題して報告会が行われました。鈴木氏は東日本大震災から現在まで、南三陸町を中心に広く支援の輪を拡げてきている中で「これからは仮設に住む方々への心のケアが大切になっていること、そして決して風化させないで支援を続けることが重要」と訴えられました。参加した 65 名の市民は、東北の方々の一日も早い復興をかみしめておられました。

6 月 16 日前橋で被災地支援報告会が開催されました！　群馬 TV ニュース放映

＜被災者の思い切々と・・・。＞

6 月 16 日（日）、前橋市下川淵公民館で「東日本大震災から 2 年 3 か月・被災地の現状」をテーマに支援活動報告会を開催させて頂きました。当日は、福島県から避難されている新妻道明さん、佐藤裕子さん、小林一行さんを迎え、「出身県が福島県民というだけで差別を受け家族が精神障害に陥ってしまったたこと」や「自主避難者に対しての行政による支援の対応がしてもらえない」こと、そして「原発事故の放射能被害によって故郷には住めなくなってしまった現状」など、厳しい現実の話を聞かせて頂きました。福島県から避難されておられる方々は、前橋市には 238 人、群馬県には 1,485 人、栃木県には 2,940 人、全国には 50,633 人（10 月 10 日調査）の方々が 2 年 8 か月過ぎた今でも避難生活を余儀なくされています。私たちは、この現実をともに共有し復興への支援を続けていきたいと思います。

４月 13 日　前橋駅北口のエキータ店の「清月堂」前橋市東北支援ショップコーナーで「雄勝ワカメ復興支援」のご協力を頂きました。

前橋市が推進する東北復興支援に多大な協力をされている**旅ガラス本舗「清月堂」**さまのご厚意を頂き、私たちが支援する**「雄勝ワカメ復興支援」**のワカメを取り扱っていただくことになりました。今でも前橋市の多くの市民の皆さま方から「本当に美味しい」と、とても喜んで頂いております。

7 月 6~7 日・11 月 5~6 日雄勝町仮設住宅のを訪ねました。自治会長・漁業組合長さんから「雄勝ワカメ復興支援」に対し感謝の言葉を頂きました。

「雄勝ワカメ復興支援にご協力を頂き本当に有難うございます。
震災から多くの時を経て、東北の沿岸部は復興の槌音が響き始め、希望の光が注いできているように見えます。しかし、細部に目を向けると復興のスピード、質、範囲などに自治体間のばらつきも見え、地域によって「復興感」の違いも目立つようになってきました。
私たちの雄勝町でも一定程度の復旧が進んでいるように見受けられますが、生活や生業の本格復興には程遠く、「町が消えていく…」感をいまだ強く感じています。漁業を中心に成り立ってきた雄勝町。漁業の復活無しに復興・復旧は難しいと考えます。元通りの生活に戻るための長い取り組みは始まったばかりです。私たちは一丸となって復興への努力をしていきます。どうかこれからもあたたかいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

5 月 5 日桐生市で「雄勝ワカメ復興支援」のご協力を頂きました。

桐生市民活動センター**「ゆい」**さまのご協力を頂き毎月第一日曜に開かれる桐生駅物産展に参加させて頂き、多くの市民の方々に**「雄勝ワカメ復興支援」**のご協力を頂きました。当日には大反響！1 時間で 200 袋のワカメが完売できました。

10 月 9 日・11 月 5~6 日福島県郡山市の 3a を訪ねました。

「安心安全アクション郡山」代表野口時子さんは、郡山市内に住む、乳飲み子を抱えて避難もできないご家族の健康ために、西日本から新鮮な野菜を仕入れて販売活動をしたり、放射能についての不安に対しての相談窓口や、子供さんたちの放射能による甲状腺検査など、郡山市民のご家族の放射能測定サービスに取り組んでおられます。大切なメッセージを頂きました。

「母親たちの願い」

3. 11の大震災以来、母親たちは悩み続けています。放射能で汚染されているとも知らずに水汲みや食料品を求める行列に長時間並ばせてしまった事、雪の中、高校の合格発表を見に行かせた事、子どもを守るために避難し、家族がバラバラになってしまった事、友達との別れをさせた事、私たち大人は子ども達にどう償えばいいのでしょうか？未来ある子ども達を守り、きれいな国土を子ども達にバトン出来るか？どうか私たちと繋がって下さい『Fukushima』はまだまだ終わっていません。
私たちを忘れないでください・・・。

写真左が郡山市の野口時子さん

第3回　特集：福島第一原発事故の現状と私たちの未来は？ 2013年(平成25年)１２月･第５号

◆福島原発　今も放射性物質が1000万ベクレル大気に放出！

2013年10月8日東京電力福島第一原発事故に伴い大気中に放出された放射性物質は「セシウムの134、137を合わせて2万兆ベクレルになるとみている」と東電の廣瀬直己社長が7日の閉会中審査の参議院経済産業委員会で語った。廣瀬社長は「現在も毎時1000万ベクレルの追加的放出がある」と大気汚染が継続的に続いているという深刻な状況にあることを示した。また、海洋への放射性物質の放出について「当初は7100兆ベクレル放出されたとみている。その後、地下水の汚染などにより、最大で1日あたり最大200億ベクレルのセシウムが放出されているとみている」と述べた。

◆事故後初めて廃炉に向けての核燃料取り出し開始しました。

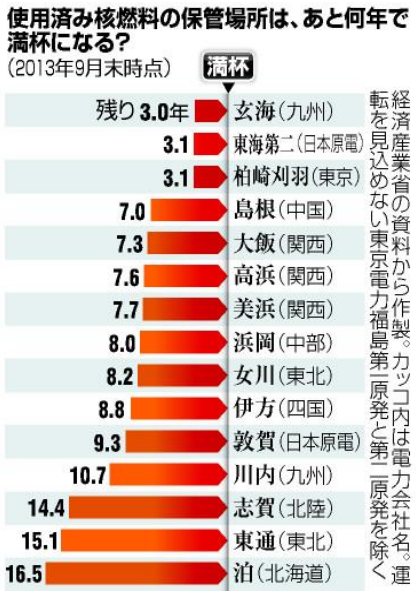
11月18日の午後、福島第一原発4号機で核燃料の取り出し作業が始まった。
この核燃料取り出し作業は比較的安全性が高い未使用燃料から行われ、後半に使用済み燃料や破損した燃料などの取り出し作業を開始する予定となっている。
4号機の核燃料取り出し作業は来年末までは続く予定で、状況次第では延長される可能性もある。福島第一原発では熟練作業員などが減っていることから、一度でも大きな問題が発生すると、本当に収拾が出来ない状態になる可能性もあり今後も油断はできない。

◆原発ごみ、行き場なし使用済み核燃料が満杯状態！（出典 朝日新聞・アゴラ ライブドアブログ）

日本の核のゴミの行方は？

処分場が決まっていないのは「廃炉のごみ」だけではない。国内では、原発で使い終えた核燃料から生まれる「核のごみ」を埋める最終処分場もない。原発の出口を整えないまま、安倍政権は「原発の活用」をうたい、原子力規制委員会が認めた原発を再び動かそうとしている。2013/02/27(木)朝、青森県・六ヶ所村の港に大きな船が接岸しました。

イギリスに運ばれて処理され、再び日本に戻ってきた“核のゴミ”です。
むき出しの「ガラス固化体」は、そばに人がいた場合わずか２０秒で死に至るほどの強い放射能を持ちます。
こうした危険なゴミをどう処理するのか。
政府は地下３００メートルよりも深い地層まで穴を掘り埋める検討をしていますが、放射能が弱まるまでの期間はなんと１０万年といいます。



今から１０万年前と言えばネアンデルタール人がいた時代。この先、気の遠くなるほど長い期間、地震や火山の噴火にも耐えられるのか？ 不安は根強く、どこに埋めるのかはまったく決まっていません。
現在、日本にある使用済み核燃料は１万７０００トン。
すでに処理を終えたガラス固化体１４００本とともに処分先が決まらぬまま積み置かれています。

フィンランドの国は2022年地下420m直接処分開始へ

こうした中、すでに地中深くに埋める方向で動き出している国があります。フィンランドの首都ヘルシンキから２４０キロ。その場所の名は「オンカロ」。
フィンランド語で「隠し場所」を意味します。
最も深い地下４２０メートルまで降りるのに２０分かかります。
ここで核のゴミは１０万年という長い間の眠りにつきます。

◆11月5~6日 福島県南相馬市民のためにボランティアで取り組む吉田邦博さんを訪ねました。

吉田さんは震災以来、地元の市民のために、自ら進んで除染活動や被爆調査のボランティア活動をされておられます。その大事なメッセージを頂きました。

2011/3/11震災直後、福島第一原発にいた、知人より「そこら中の配管から水が吹き出していて、原子炉が冷やせていないから危険だから遠くに逃げろ」と一本の電話が掛かってきた。それにより、私の人生が変わった。

テレビでもラジオでも危険であることは一切言っていない。後で解ったことだが、東京電浴や東北電力の大部分の家族は、当日に避難しておりました。避難することは正しい選択ではあるが、何故それを住民に周知しないのか。異常に思えた。

仮に自分たちが犯したミスではないとしても、人道的に許されるものではない内容である。しかも、報道までもが、政府の言いなりとなり、「直ちに危険はない」と報道している。一体この国は、どうなってしまったのだろう。

産業界にばかり目を向け、多くの市民の健康すら蚊帳の外。放射能の問題だけでは有りません。沖縄基地、水俣病、食品添加物、農薬、ワクチン、憲法改正問題など挙げれば、きりが有りません。全て、政治が悪い為に起きている問題です。

私も勉強中ですが、まずは知ること、それが始まりです。日本の将来を考える為に正しい判断をしなければなりません。家族の問題でもあり、この国の人、みんなの問題です。未来によりよい社会を・・・。　　安心安全プロジェクト　吉田邦博

黒澤　明　監督 明治43年1910.3.23―1998.9.6(満88歳没)の直筆ノート(1985~86年)

1990年に公開された黒澤明監督の『夢』の中に『赤富士』という作品がある。これは、黒澤監督自身が見た夢を映画化したものだ。原発が爆発し、逃げ惑う人々の姿が描かれている。黒澤監督の長男・久雄さん（67）によると、父親の中で、原発や原子力問題は大きな位置を占めていたという。
『夢』の製作に携わったスタッフや関係者が、今年で没後15年になる黒澤監督の原子力に対する考えを語った。さらに、今回、埋もれていた黒澤監督直筆のノートを発見。そこには、黒澤監督の率直な思いが綴られていた。

人間は　間違いばかり起しているのに、これだけは絶対間違いは起さないなんて　どうして云えるだろう。
それも、もし間違ったらおしまいだと云うのに、どうしてそんな事が云えるんだろう。
高い木に登って、自分のまたがってる木の枝を　一生懸命切っている阿呆に似ているね。
猿は火を使わない。火は自分達の手に負えない事を知ってるからだ。
ところが、人間は核を使い出した。　　それが、自分達の手に負えないとは考えないらしい。　　火山の爆発が手に負えないのわかっているのに原子力発電所の爆発ならなんとかなると思ってるのは　どうかと思うね。
「原発は安全だ」「危険なのは操作のミスで原発そのものに危険はない」「絶対ミスは犯さないから問題はない」ってぬかした奴等許せない。
原子力発電が安全だなんて云っていた奴等は、今、どうしてやがるんだろう。
そいつ等の顔が見たいね、全く！

一緒に平和活動へのサポーターになりましょう！

年一口¥3,000-の支援（サポート）が世界中に拡がっています。

東日本大震災も世界中の国々から支援を寄せて頂いています。今や地球が一つの家族です。私たち日本人も、思いやりの心と行動を、世界中に示す時代が来たのです。
ピースサポート協会は、多くの皆さんと共に、思いやりあふれる家庭や社会を拡げ、東日本の被災された方々や、海外の貧困生活に苦しむ子供たちへの支援を推進して行きたいと願っています。どうぞ皆さん、私たちと一緒に平和支援のサポーターになりましょう。あなたの支援（サポート）が世界中に拡がっています。

世界中の幸せは一人の人の心から
NPO法人
ピースサポート協会
事務所　〒379-2143 群馬県前橋市新堀町190番地1
TEL/FAX　(027)265-2277　　携帯 090-1113-9200
E-mail info@peace-sa.com　http://peace-sa.com